若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

ハンドレッズの誇り

札幌徳洲会病院
玉井（たまい）　雅也（まさや）

札幌生まれ、札幌医科大学卒の研修医１年目です。写真は、大学１年次で準硬式野球部の春季リーグ戦の試合を終えた後に、演劇部の学祭公演に向けた準備を野球部の格好のまま参加していた写真です。ちなみに大学１年前期は大学時代唯一再試にかからなかった時期でした笑

初めまして、玉井雅也と申します。今春、札幌医科大学を卒業し、札幌徳洲会病院にて初期研修をしております。医師として駆け出したばかりですが、日々の学びを糧に、全力で研修に取り組んでいます。

この度は、大学時代に準硬式野球部の先輩であった大島陸先生のご紹介で、執筆の機会を頂戴いたしました。大島先生は面倒見がよく、ボケもツッコミもこなすオールラウンダーで、私も多くの刺激をいただきました。

本エッセイは自由なテーマということで、私が医学生時代に得た「成績だけでは測れない学び」についてお話ししたいと思います。

「ハンドレッズ」という言葉をご存じでしょうか。私の大学では、定期試験で成績が100番台に入る学生をそう呼んでいました。私はその常連で、医学生としては決して模範的とは言い難い存在でした。しかしだからこそ、他の学生にはない、医師人生に活きる貴重な経験を得ることができました。

一つは、部活動での経験です。大学４年時に準硬式野球部の主将を務めましたが、コロナ禍により長期間活動停止を余儀なくされ、ようやく再開できたのは春季リーグの約１か月半前。限られた時間の中で選手の状態を把握し、戦力を見極め、練習計画を立てオーダーを編成しました。結果、１部リーグ残留を果たし、リーダーとしての柔軟性と責任感を学ぶ大きな機会となりました。

もう一つは、アルバイトの経験です。塾講師としては、小学生から高校生まで幅広く指導し、相手の理解度に合わせて伝える力を磨きました。韓国料理店では、忙しい店内での臨機応変な対応力を身につけました。これらの経験は、医療現場での説明力や対応力に直結すると実感しています。

今回のエッセイには書ききれませんでしたが、演劇部や救急医療サークルにも所属し、家庭教師やコンビニのアルバイトも経験しました。週７で部活、週５でバイトという生活に驚かれましたが、多忙な中で得た人との出会いや場数からの学びは、何ものにも代え難い財産です。

将来は救急科や総合診療科など、幅広い知識と柔軟な対応が求められる分野を志しています。学生時代に培ったチームワークや判断力、多様な価値観を尊重する姿勢は、まさにその現場で活きると信じています。これからも一つひとつの出会いや経験に真摯に向き合い、患者さんにとって最善の医療を届けられる医師を目指してまいります。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。